ひむかかるた通信発刊記念特集

ひむかかるたってなんだろう？

現在では、大会も開催され子どもたちの遊びとして広まってきた「ひむかかるた」。このかるたが、どこで・誰によって・何のために作られたのかはあまり知られていないのではないでしょうか。そこで「ひむかかるた通信」発刊記念特集として、今号より３回に渡り、「ひむかかるたってなんだろう？」をテーマに、そこにある歴史や意義、そして今後の展望について紹介します。ひむかかるたの生みの親とも言える、関東学院大学教授：新井克弥氏（元宮崎公立大学准教授）に何故ひむかかるたを作ろうと思ったのか、その経緯を取材しました。

かるたでつくる、みやざき大好きっ子！

地域活性化をかるたで解決!?

２００５年、宮崎公立大学に開学10周年を記念した宮崎公立大学地域研究センターが開設しました。

「宮崎の地域生活に関わる課題を研究し、その結果を地域に還元する」という理念の下、できたばかりのセンターの取り組みを充実させるために大学教員から地域活性化についてのアイデアを募集しました。

パソコン研修やボランティア活動などが並ぶ中に「ひむかかるた」の文字。これが、当時宮崎公立大学准教授だった新井克弥氏（現関東学院大学教授）が提案した企画だったのです。

この時から〈みやざき大好きっ子〉を育てる取り組みが始まりました。

宮崎の地域再発見に挑む！

新井氏が初めて宮崎に赴任して感じたことは、宮崎県民の人と人との結束の弱さ、地域への愛着のなさでした。

今でこそ、有名な宮崎地鶏やマンゴーなどですら、全国区に対してはうまく発信できていませんでした。多くのグルメや美しい景色が眠っているにもかかわらず、県民はこの宮崎の魅力になぜか気付いてないと日々ひしひしと感じるようになりました。

「宮崎県民はもっと自分の県を知って、自県に誇りをもつべき」。新井氏のこの思いがひむかかるたを生むきっかけとなりました。

「ひむかかるた」は救世主？

ひむかかるたのモデルとなったが、60年以上続いている〈かるた界の大先輩〉群馬県の「上毛かるた」です。大会に参加する児童は、地区大会まで含めると年間９万人とも言われています。

幼いころから遊んでいるかるたを通して、自分は群馬県民という意識と愛着が強い。中学時代を群馬県で過ごした新井氏は、かるたの力に驚かされました。

この経験から、新井氏の中で「地域活性化」と「かるた」が結び付いたのです。

かるたを通して、子供達に遊びながら地域の事を学び、地域への愛着を深めて欲しい。そして、かるたと共に成長した宮崎大好きっ子に「新しい宮崎」をつくってもらい、宮崎の地域活性化に一役買いたい――。

宮崎の夏の太陽のような熱い思いが込められています。

（宮崎公立大学４年・倉永奈津美）

関東学院大学教授　新井　克弥

あらいかつや　昭和 35 年、静岡県生まれ。52 歳。法政大卒業後、東洋大大学院社会学研究科修了。専門はメディア社会論。フリーライター、予備校教師などを経て、平成 10 年に宮崎公立大講師。同大准教授を経て、20 年から現職。著書に『カオサン探検』『劇場型社会の構造』など。

次号では「ひむかかるた」制作の道のりを特集します

ひむかかるた読み札巡り

一見、フェニックスのことを表現しただけのように見えますが、実はこれ、宮崎の子どもにたとえられています。こどもたちが高く、大きく、たくましく育ってほしいという願いがこめられているのです。

フェニックス
高く大きく
たくましく

ご存知、宮崎が日本に誇る畜産品・宮崎牛です。牛が自分のことを「おいしい」といい、なおかつ自ら宮崎牛を食べている（ステーキでしょうか？）という、ちょっとシュールな感じがユーモラスですね。

我が輩は
宮崎牛だよ
おいしいよ

この札に歌われているのは鳥原ツルという人物です。一般にはあまり知られていませんが、日本で戦後はじめて小学校長になった女性です。宮崎が誇る女性を広く知らしめようと、この札がつくられました。

花一輪
教えの道に
香りたつ

高齢者に笑顔と会話を生んだ「ひむかかるた」の新しい可能性

ひむかかるたが老人ホームに!?

おじいちゃん・おばあちゃん、「ひむかかるた」で遊ぶ

宮崎の子どもたちに、「宮崎についての語彙を増やしてもらいたい」とのねらいで作られたひむかかるた。そんなかるたが最近、子どもの一切いない「老人ホーム」でも活躍しはじめています。その実態を調査するべく、今回は特別養護老人ホーム「皇寿苑」へ取材に伺いました。

ひむかかるたを楽しむおじいちゃん、おばあちゃん（皇寿園にて）

特別養護老人ホーム・皇寿園ではおじいちゃん・おばあちゃん達が「ひむかかるた」に夢中。普段はおとなしい方も、イスから身を乗り出し絵札に飛びつきます。

同施設では、利用者同士や介護士の交流を兼ねて、レクリエーション活動を週に２・３度行っています。

その中で「ひむかかるた」は手や目、耳など〈全身を使える遊び〉として大好評なのです。

「ひむかかるた」を活動に取り入れたのは、宮崎公立大学出身で、皇寿園に勤める介護士の大迫幸恵さん。

以前は風船バレーや輪投げなど、体を使うものが主でしたが、活動のバリエーションを増やしたいと思い、学生時代に制作に携わった「ひむかかるた」で利用者と遊んだのが始まりとのことです。

絵札が会話のきっかけに

大迫さんは、その他のかるたでも活動を試みましたが、反応はいまひとつでした。

なぜ「ひむかかるた」だけがおじいちゃん・おばあちゃんたちを夢中にさせるのでしょうか。「〈宮崎〉を感じさせる色とりどりの絵、それが描かれていることが多くの高齢者の興味を惹いているのでは？」というのが大迫さんの見解です。

例えば、あるおじいちゃんは「冷汁は夏の暑さを吹っ飛ばす」という絵札を手に取って「冷汁は家庭によって作り方や味が違うんだよ。うちの冷汁が一番おいしい」と嬉しそうに話してくれたそうです。

このように、「ひむかかるた」が会話のきっかけとなることで自然とコミュニケーションが生まれてくるのです。

バリアフリーな『ひむかかるた』へ

「ひむかかるた」が新たなコミュニケーションを生み出している一方、高齢者にとっては文字が小さく、見えづらいという難点が。その点について大迫さんは「当施設では読み札を見せながら何度も繰り返し読むなど、独自の工夫を行っています。より多くの方に「ひむかかるた」を広めるには、文字の大きさや配色をアレンジした高齢者向けのかるたも必要。」とバリアフリーな『ひむかかるた』の必要性を語ってくれました。

これが実現すれば、小さい子どもからお年寄りまで、宮崎に住むすべての人たちが『ひむかかるた』を通じて、過去の宮崎、また今の宮崎、さらには未来の宮崎を語らいあうような交流が生まれるのではないでしょうか。

（宮崎公立大学４年・河野瑞紀）

キーパーソンに聞く

介護士　大迫　幸恵
（宮崎公立大学・第 11 期生）

当施設の認知症フロアでは、70代から90代までの高齢者を対象に、週に３回程度ひむかかるたを用いたグループ・レクリエーションを実施しています。

子どもの頃からなじみのあるかるたは、難しい説明が要らず、誰でも楽しめるため、人気ゲームの一つになっています。日頃は動きが緩慢な高齢者が、かるたが始まると椅子からおもむろに立ち上がり、前のめりになって取り札を探すという、普段と違う様子にスタッフも驚いています。高齢者ならではの特別ルールもあります。

たとえば、難聴の人は、声が聞こえにくいため、読み札を見せて対応したり。また、ひむかかるたは宮崎の名所や名物が散りばめられているため、認知症者の高齢者には思い出話を引き出すツールとしても利用されています。

ひむかメディアアクション

HIMUKA MEDIA ACTION

宮崎公立大ＯＢが集まる「ひむかメディアアクション」

「ひむかメディアアクション」は宮崎公立大学 OB のメディア関係者（テレビ局、新聞社、広告代理店など）を中心にメンバーが構成されています。講演会や「ひむかかるた」の大会運営・広報などの活動を通して個々のメンバーが様々なスキルを身に着け、「宮崎における地域メディアの活性化に一役買おう」というのが本クラブの目的です。

Facebook：http://www.facebook.com/rachimuka

E-Mail：himukama@gmail.com